

法華仏教の不易流行について

石川 教 張

(現代宗教研究所所長)

一

「不易」^{ふいまき}と「流行」^{りゅうこう}という言葉がある。

「不易」とは、変わらないこと、永遠なることを指す。仏教用語では「ふやく」と読む。不変の法、道理をいう。

「流行」は、変化すること、ある事がらや現象が新しくゆきわたることである。

この不易と流行を一体と見なして、「不易流行」の芸術観、詩的精神の信条をうち立てたのは、松尾芭蕉である。

『広辞苑』によれば、芭蕉の俳諧用語である不易流行について、「不易は詩的生命の基本的永遠性を有する体、流行は時における流転の相で、その時々の新風の体。この二体は共に風雅の誠から出るものであるから、根元においては一に帰すべきものである」と説明されている。

芭蕉は、「おくのほそ道」の行脚を終えたのち、門人に初めて「只今天地俳諧にて万代不易に候」(去来宛書翰・元禄三年)と語り、新しい芸術信条が「不易流行」の想念にある点を示している。

この不易流行の詩観は、門人士芳の『三冊子』に次の如く記されている。

師の風雅に万代不易あり、一時の變化あり。この二つにきはまり、その本一つなり。その一つといふは風雅の誠なり。不易を知らざれば実には知らず。不易といふは、新古によらず、變化流行にもかかはらず、誠によく立ちたる姿なり。代々の歌人の歌を見るに、代々その變化あり。また新古にもわたらず、今見るところ昔見しに変わらず。あはれなる歌多し。これまず不易と心得べし。また千變万化するものは自然の理なり。變化に移らざれば風改まらず。

先の『広辞苑』の説明は、この一文にもとづいている。ここには、俳諧における芸術生命の永遠性と、生成變化に呼応し新しい作風を生み出す事によって永遠性を保持してゆく実践的営みの普遍性が語られている。

こうした芭蕉の不易流行の芸術観は、「風雅の誠」を根底に成立しているという。風雅の誠とは、詩的真実を追求する心を意味する。

不變性を有する永遠なる芸術の本体・原理としての不易と、千變万化する自然の理および生成流転の現象に應じて新たに生命を更新しゆきわたらせる流行とは、いずれも我意を捨てた無私の詩的精神、時代・風俗の変転に煩わされずに真実を探究する芸術への自立精神を根源として生み出される。

この真実探究の想念を基底にする事によって、永遠なる時間における生命の不變的営みは永劫絶える事なく連続して保たれ、日々新しく活現し働いてゆく。これが、天地自然の理法であるという。しかも、真実探究の心は世間の好みに順応する「風俗流行」に依らず、生成變化する自然の理に自らを投げ入れ、私意の計量を投げ捨てた「天地流行」の実践に向う事により、永遠不變の誠の芸術的作風を新たに生み出す、というのである。

真実探究の自立した詩的精神を根底として、芸術の本質・原理(体)としての永遠の生命(不易)と、變化流転の現象を通しての新しい生命の働き(用)があるという芸術観は、不易即流行、流行即不易の実相を表現するものであった。

この芭蕉の語った不易流行は、俳諧や芸術のみに限られるものではない。普遍的な観点、信条、精神と実践のありようを示すものと考えられる。

日蓮宗の信仰的立場は、釈迦仏（仏）・法華経（法）、本化上行日蓮聖人と日蓮一門（僧）の三宝受持にある。

釈迦仏の寿命の永遠性は、本仏固有の万代不易の本質である。「衆生を度せんが為の故に方便して涅槃を現ず、而も実には滅度せず、常に此に住して法を説く」（自我偈）のは、本仏釈尊における不易流行の働きである。また、釈尊による二乗作仏、悪人成仏、女人成仏などの三世説法の儀式と成仏救済は、いずれも本仏の生命が固着したものでなく、法・報・応三身を現わして、生成流転の変化の中で新たに躍動し化導の働きを示す事を物語っている。更に、本仏釈尊が上行等の四菩薩を唱導の上首とする地涌の菩薩に法華経の題目を付属し、末法悪世の弘教を召命した点も、「令法久住」（不易）は末世の菩薩行（流行）によって実現するという真実の信仰精神とその実行を明らかにしたものである。

こうした本仏釈尊の生命の永遠性（不易）と本化の弟子による菩薩行（流行）の根源にあるものは、法華経と法華経の題目である。一切経の肝心、法華経の心をあかし、本仏釈尊の全ての功德を結晶している法華経の題目に、私意を捨てて没入する真実追究の心魂が唱題であり、それが真実の信仰の誠である。

この観点は、日蓮聖人によって次のように説かれている。「法華経は釈尊の父母、諸仏の眼目也。……仏は所生・法華経は能生、仏は身也、法華経は神也」（『本尊問答抄』定一五七四―五頁）「法華経の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり」（『唱法華題目抄』定二〇二頁）「南無妙法蓮華経肝心なり」（『報恩抄』定一二四二頁）等々の教示に明らかである。

永遠なる仏の生命と衆生救済の菩薩行は、南無妙法蓮華経を根源として生み出される。この法華経の題目を根本として唱題修行に投入する事が永遠の命を受け取り、生成変化の中で菩薩行に取り組む純粹で真実な心とその働きのである。

この意味で、三宝受持を具えぬ、私意に任せた唱題は、真実追究の題目の誠から背反したものであり、法華経の題目を根底としない仏法は法華仏教の真実から離れたものになる、という厳しい自己折伏が必要となろう。

日蓮聖人は示されている。「但し聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と、我等が唱へ申す題目の功德と、何程の多少候べきやと云云。更に勝劣あるべからず候。其故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、愚者の然せる火も智者の然せる火も、其差別なき也。但し此経の心に背て唱へば其差別有るべき也」(『松野殿御返事』定二二六五頁)(…は筆者)。

たとえ言葉と名は現象面では同じように見えても、三宝受持・上行所伝の題目という「法華経の心」に背くならば、それは真実追究の信仰の誠と本体に根ざさぬ唱題という事になろう。

同時に、この法華経の題目という真実・純粹な心より生み出され、生成変化の中で新しい生命を蘇生・開発する事によって、永遠の生命を永續させる新しい教風を樹立する努力が必要である。

それは、法華仏教の不易流行をめざす道でもあろう。

二二

法華仏教の不易流行にとって、摂受・折伏二門は修行・弘通の要道である。

摂受・折伏は、単なる布教の手段・方法ではない。摂受は「摂引容受」の字義より説得的で柔軟な方法、折伏は「破折屈伏」の意味から批判的で強硬な手段とされるが、これは部分的・局部的な方法論に限定するものである。

法華經においては、摂受・折伏は積尊における成仏救済の化導の始終を貫く原理的姿勢としてゐる。法華經は、余經の一偈をも信ぜず、法華一經を真実として一仏乘への歸入を説く。ここから、「法華折伏破權門理」の法門が示された。摂受・折伏の第一のメルクマールは、法華經への純粹で真実な信仰に立つか否かにある。摂受は他經ともに法華經と同じ価値とし、折伏は純一無雜の法華信仰を指している。「唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり」(『如説修行抄』定七三五頁)とは、これをいう。

日蓮聖人は、末法相應の修行は法華經の折伏であると説示した。

「夫(れ) 摂受折伏と申す法門は水火のごとし。火は水をいとう。水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう。折伏の者は摂受をかなしむ。無智悪人の国土に充滿の時は摂受を前きとす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者の多き時は折伏を前きとす。常不輕品のごとし」(『開目抄』定六〇六頁)

「一乗流布の時は權教有て敵と成りてまぎらはしくば実教より可責之。是を摂折二門の中には法華經の折伏と申す也。……されば末法今の時、法華經の折伏の修行をば誰か如經文行じ給へしぞ」(『如説修行抄』定七三五―六頁)。

法華經では、安樂品が摂受、勸持品は折伏とする。教門の折伏は寿命品における法華經の題目の提唱にある。行門の弘經の要規は、末法においては不輕品を基本としている。法華經の題目の折伏下種、下種結縁の行は、日蓮聖人の説かれたように、不輕品のごとき折伏を前とするものである。

不輕品は、法華經を弘めるに當って、増上慢の人々の所に強いて赴き、礼拝讚歎して、「我深く汝等を敬う、敢て輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作仏することを得べし」と語り続けた不輕菩薩の真実追究の信仰精神とその実践をしるしている。

仏種をうえようとして、強いて但行礼拝した下種結縁の実践が、法華折伏に他ならない。

それは、変わる事なく救済をそそぐ、仏の永遠なる命の不易流行でもある。

そもそも、折伏は他者を破責し屈伏せしめる事が目的ではない。衆生の大苦を見るに忍びないという止むに止まれぬ信仰の誠より生れ出て、法華經の題目によって苦を抜き安樂を与える「慈悲の折伏」でなければならぬ。「仏大慈悲を起し五字の内に此珠を裏み末代幼稚の頸に懸さしめたもう」(『観心本尊抄』定七二〇頁)「日蓮が慈悲、大ならば、南無妙法蓮華經は万年の外未來までもながるべし」(『報恩抄』定二二四八頁)とは、いずれも慈悲より表わられた折伏下種、題目弘通を示したものである。

四

法華仏教の不易流行は、法華經と日蓮聖人固有の法門を信受すること、生成変化する人間社会と自然の理に呼应して、日蓮聖人の体現した法華仏教を活現し働かせてゆく事を通して不変性と永遠の命を新しくよみがえらせてゆくこと、の両面を具えている。

それゆえに、法華仏教の不易流行は、観念的、固定的に硬直したものではない。私意を容喙させた自己判断に立つものであってはならない。我意を捨てて不変的で永遠なる法門に自己を投げ入れ、しかも時々に変化に対応し、法門を働かせて永遠の生命を活現せしめるものでなければならぬ。しかも、法門の不変性・永遠性とは、個人・集団・教団・社会全般より超克した普遍的な広がりを持っている。

こうした法華仏教の不易流行観に立つならば、先ず日蓮聖人の体得した法華經に対する純一無雜の信受、慈悲を体した但行礼拝、信仰の誠である法華經の題目の弘通こそ肝要である。

同時に、他者や社会の現実とその変化を広く深く観察し、他宗、異教に対しても、その思想基盤への理解にもとづき、緊急な社会的課題を同一の苦として共有しつつ相互交流と協力・実践に取り組む新しい教風が具現化される事が必要である。

この観点に立つ事によって、自然や人間社会の苦をなくすために献身している人々に深い敬意を払い、但行礼拝の一分を果してゆく想念と信仰の誠を深める事が出来るであろう。

また、相待と絶待の指標にもとづき、自然や人間社会の固有の不易性をとらえ、多様に变化する自然と人間社会の理を省察する事が必要である。これによって、事象に関する比較・検討・批判・価値づけ（相待）と、事象全体を包摂・開顕・帰入・意味づけ（絶待）する不易流行の視座を具体化する事が求められよう。

なによりも、「願わくば此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆俱に仏道を成ぜん」（化城論口品）という法華仏教における永遠性と普遍性をするす不易流行観に立つ信仰的眞実、唱題の誠を持つ事が大切ではなからうか。